

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 年 月 日現在

機関番号：12611  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520096  
 研究課題名（和文） 世界美術史における日本の再評価にジョルジュ・サールが果たした先駆的役割  
 研究課題名（英文） The pioneering role of GEORGES SALLES concerning the reevaluation of Japanese Art status in the context of the World Art History  
 研究代表者  
 SCHWARTZ LAURE (LAURE SCHWARTZ)  
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授  
 研究者番号：20377013

研究成果の概要（和文）：西洋における日本美術への眼差しや研究の歴史を辿る中で、本研究では、優れた学芸員であり著名な知識人であったジョルジュ・サール（1889～1966）の思想と功績を明らかにすることができた。サールは、ルーヴル美術館初のアジア美術部門の創設に携わり、次いで同部門の国立東洋美術館（ギメ美術館）への移管を指揮し、そこで1941年より学芸員を務めた。本研究では、20世紀前半のフランスに影響を及ぼした極東美術、とりわけ日本美術の概念やその普及に関わる重要な歴史と発展について考察することができた。

研究成果の概要（英文）：As a part of our studies devoted to the history of Japanese Art in western cultures, the present research has shown the importance of the work and the thought of Georges Salles (1889–1966), an Art historian, Orientalist and pioneering Museologist, who, after being engaged in the creation on the First Department of Asian art at the Musée du Louvre, afterward organized the move of these collections to the Musée National des Arts Asiatiques (Musée Guimet), where he has been appointed curator in 1941. This research allowed us to reconsider the main historical developments regarding the diffusion of the Asian Art collections – and Japanese art in particular – that had been occurring in France, during the first half of the 20th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：：哲学・美術 美術史

キーワード：ジョルジュ・サール ギメ美術館美術史 日仏交流 博物館学 ルーヴル美術館

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、エコール・ド・ルーヴルでの美術史及びミュゼオロジーの研究、そして、ルーヴル美術館美術工芸品部門の学芸員として 1893 年より同美術館日本美術コレクションの初代責任者を務めたガストン・ミジョンについての研究の中で、ジョルジュ・サールの名を展覧会目録などの資料で目にする機会が度々あり、ルーヴル美術館の実習生、次いでギメ美術館学芸員として、西洋文化と極東文化それぞれに同じ情熱をもって関心を寄せていたサールの存在の重要性に着目していた。

生前にルーヴル美術館に見事な極東陶磁器コレクションを寄贈したエルンスト・グランディディエについての学位論文（「エルンスト・グランディディエ ある美術館員の人生と使命；エコール・ド・ルーヴル」1991 年）の中で、研究代表者は、初めて極東美術に充てられた展示室に関し、ミジョンの尽力でルーヴル美術館内に設置された最初の展示室から、ジョルジュ・サールの指揮で行われたギメ美術館への移管まで、初めて詳細な調査を開始した。その後、ギメ美術館日本部門の学芸員補を務めていた際には、フランスにおける極東美術コレクションの歴史に関する様々な展覧会（「ギメ美術館所蔵 江戸時代の来迎像」、展覧会目録『アジアの歳と顔 *Âges et Visages de l'Asie*』、ディジョン美術館 - 仏文化庁刊、1996 年；日本美術図版解説、展覧会目録『幾千の芸術庇護者たち (*Des mécènes par milliers*)』、ルーブル美術館、R. M. N 刊、パリ、1997 年）の資料整理で、あるいは彫刻と浮世絵の電子目録の作成過程で、ヨーロッパにおける日本美術の普及に果たしたサールの大きな役割を認識するに機

会があった。

本研究はまず、研究代表者が 20 年ほど前までギメ美術館や、東洋美術史の講師を務めていたエコール・ド・ルーヴルで行っていたような美術品への直接的アプローチに基づいた様々な調査を土台とする。これに 1998 年の来日以来、東北大学東洋日本美術史研究室や国立京都博物館で行ってきた日本仏教絵画史に関する研究成果が加わった。こうした二国にまたがる研究と方法論に支えられた本研究はまた、2004 年よりお茶の水女子大学比較日本学教育研究センターで行ってきた研究・教育活動とも深く関わるものである。同センターでは、研究代表者は海外における日本学の歴史と発展を、比較文化的な視点で紹介、研究することを使命とし、特に欧米における日本美術史の黎明期に重点をおいた（「フランスにおける日本美術史研究の起源と発展についての一考察」；「フランスにおける日本学の現状 - その起源と発展、今後の展望 -」お茶の水女子大学比較日本学研究センター年報、2004 年；「フランスにおける日本仏教美術研究への概観 その誕生と発展」『日仏図書館情報研』31 号、2005 年）。

その他、4 年ほど前から大学院生ゼミやガストン・ミジョン研究においても（「ガストン・ミジョン(1861-1930)、ルーブル美術館極東美術コレクション初代学芸員 - 日本滞在百周年にあたりその業績を振り返る - 日仏美術学会 25 周年記念シンポジウム：美術史におけるフランスと日本、日仏会館、2006 年 1 月 8 日、お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報 2007 年掲載）、ミジョンの後継者であるジョルジュ・サールの功績に度々触れ、彼に関する様々な未刊資料の収集、翻訳に着手するチャンスを得た。

こうしたガストン・ミジョンに関する研究

を背景とし、またその延長として、その後継者である偉大なる東洋学者ジョルジュ・サールに光を当てようと思った次第である。ルーヴル美術館において、美術工芸品部門から独立したセクションとしての最初のアジア美術部門の設立に携わったジョルジュ・サールは、次いで同部門のギメ美術館への移管を担った。そこでサールは館長として、ギメ美術館の目的を見直し、今日のような一流の国立東洋美術館にするべく、コレクションの再編を行ったのである。

ガストン・ミジョンと同様、ジョルジュ・サールの特徴でもあるその多様な顔、美術史、あるいはミュゼオロジーの分野におけるアプローチの斬新さ、そして西洋・東洋文化において国際的に取り組んだ活動の広がりや多様性は、彼らの伝記をまとめる障害ともなり、実際にまだ存在していない。

こうした状況と、日本や欧米の研究者らがこのテーマに寄せる関心も踏まえ、本研究を提案することとなり、大きな成果を得るに至った。

## 2. 研究の目的

本研究はまず、今日ではあまり知られていない、世界美術研究史における中心人物の功績を再評価することが特色である。特にジョルジュ・サールの活動の先駆性、西洋における日本美術の評価に与えた彼の影響に着目し、日仏文化交流史の重要な一段階を明らかにすることを目指した。本研究の主な目的は従って以下の通りである。

(1) ギュスターヴ・エッフェルの孫でありルーヴル美術館及びギメ美術館の学芸員、また雑誌「アジア美術」の編集長、仏国立美術館総局長、国際博物館会議(ICOM)議長といった多様な顔をもつジョルジュ・サールの経歴と、著書の解説付き書誌を作成する。

(2) 極東美術を展示する美術館の歴史と、世界美術における日本美術普及の背景を振り返る。数々の展覧会カタログとサールの著述を調べながら、初めてルーヴル美術館にアジア美術部門を導入し、最終的にこれをギメ美術館へ移管した目的を明らかにするために、こうした様々な動きの背景とその意味を検証した。

(3) *Le Regard* (『眼差し』) (Plon, 1939)、*Au Louvre, scènes de la vie quotidienne* (『ルーヴル美術館 日常の場面』) (Domat, 1950)、*L'univers des formes* (シリーズ「形式の世界」) (Gallimard depuis, 1962) といった著書、同時代に生きたアーティストらとの間に交わされた書簡、極東地域への旅行に関する覚え書きや日本美術に関するいくつかの論文に着目し、分析する。

(4) 今日はほとんど知られていないが、ヨーロッパのみならず英語圏やアジア諸国の多くの美術史家やアーティスト、美術品コレクター、作家、政治家らとの交流に着目しながら、ジョルジュ・サールの率先的行動、思考、著作を当時の国際学術・芸術ネットワークの背景の中に捉えなおす。

## 3. 研究の方法

方法論的には、本研究は文献と視覚的資料の調査、理論と実践という二重のアプローチを特色とする。美術史家、学芸員、そして博物館学者としてのジョルジュ・サールの功績の全体を捉えるために、美術史、とりわけ極東美術に関する膨大な著述を分析し、そして彼が保存、展示し、フランス国内外の美術館を通しての世界的な普及を担った美術品や多くのコレクションを調査することとなった。従って本研究は膨大な翻訳の仕事を含み、また今日、極東美術に関しては、その多くがギメ美術館に所蔵されている絵画、彫像、美術工芸品を直接的に調査することが必要となった。

こうした調査は一方で、サールが美術史に関する著作の中で展開したような比較文化的方法論を再活用するものにもなった。サールが西洋において極東美術の再評価に貢献したのは、当然東洋学者としての立場から、そして同時に国際的なミュゼオロジーを提

唱、推進した先駆者として、また古今の芸術を熟知した、人文主義的な学芸員としてであった。

同時代の芸術文化への深い知識と、芸術交流の歴史と文化的アイデンティティの構築への高い関心、フランス国立美術館総局長、そして ICOM 議長としての功績、日本をはじめとするアジアで果たした数々の任務により、実際にサールは各国の芸術へ深い関心を寄せ、こうした芸術の受容と展示の方法について長期にわたって検討することになる。

従って、日本、中国、ヨーロッパ、コロンブスによる発見以前のアメリカ大陸、そしてイスラムの美術の普及に捧げられたサールの活動や著書を突き合わせ、比較することで、サールの博識を押し量りつつ、それが西洋における日本美術の展示や評価にどのように影響を及ぼしたかを明らかにできると考えた。

#### 4. 研究成果

世界的な日本美術史の評価に果たしたジョルジュ・サールの役割をめぐる本研究は、以下の三点において極めて有意義な成果をもたらした。

(1) 三つのタイプの資料の入手とそれらの分析 (①ジョルジュ・サールの著書 ②ジャポニズム、及び欧米における 19 世紀末以降の日本美術史研究の発展に関する資料 ③ ミュゼオロジー、世界美術に関する資料) によって、アジア、とくに日本美術の世界的認知と普及へとサールを駆り立てた歴史的、文化的背景に関するいくつかの点を明らかにすることができた。また、美術史学、博物館学におけるサールの考え方や功績の特色・意義を明らかにし、比較文化的視点と、歴史的、国際的視野のもとにこれを捉えなおすことができた。

(2) ヨーロッパ (パリ、スイス)、アジア (インド、韓国) での数回に渡る研究滞在では、様々な研究施設や美術館 (チャンディーガルの美術館、プサンの美術館と寺院、ソウルの美術館、フランス国立図書館、フランス国立古文書館、ルーヴル美術館学芸員図書館、ギメ美術館附属図書館、国立装飾美術館附属図書館、ポンピドゥー・センター内カンディンスキー図書館) の研究員、学芸員らの協力を得て、数多くの情報や資料 (私的古文書、展覧会カタログ、新聞・雑誌の記事、書簡) を収集することができた。これらは、ギュスタヴ・エッフェルの孫、レジスタンスの闘士、作家、旅行家、考古学者、学芸員、博物館学者としてのジョルジュ・サール自身についてのみならず、アジアやフランスにおけるアジア美術の最初のコレクションの歴史に関するものであった。日本と同様フランスでもほとんどが未刊であるこれらの新資料から、サール自身と、戦争への参加経験、またアジア旅行や家族、とりわけ著名な祖父エッフェルについての貴重な証言を集めることができた。そして、そういった事柄が、同時代の芸術に対するサールの評価、アジア美術の保存と展示、普及のためにとった行動に影響を与えた可能性があることを明らかにすることができた。

(3) これらの資料の目録、写真、和訳によって、お茶の水女子大学でこのテーマに関する新しい演習を設け、同大学比較日本学教育研究センターの活動の一環として、欧米における日本美術コレクションの歴史と受容、そして日仏芸術交流に関する、二つの重要な国際シンポジウムを開催することができた。そして、日本、欧米におけるジョルジュ・サールと当時の著名な学者、芸術家、収集家との関係に着目することで、美術に関する史料編纂

とアジア、特に日本と欧米の芸術交流に関する問題と今後の研究の展望を、広く学生、研究者らと共有することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① ロール・シュワルツ=アレナレス  
「チャンディーガルからパリへフランスの美術館におけるアジア美術受容の変遷への一考察」『美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究—全アジアから全世界へ』(2013年 科学研基盤研究[S] 『研究成果報告書』) 査読無し
- ② ロール・シュワルツ=アレナレス  
「西洋に響く能— 移行・翻訳・解釈—」比較日本学教育研究センター年報 2013年9号 pp. 7-17 査読無し
- ③ ロール・シュワルツ=アレナレス  
「ファン・ゴッホと日本—ガシェ芳名録紹介本をめぐって—」比較日本学教育研究センター年報 2012年8号 pp. 53-60 査読無し
- ④ ロール・シュワルツ=アレナレス  
「日本の建築空間と庭園—明治から20世紀初頭にかけての欧米におけるその受容と及」比較日本学教育研究センター年報 2011年7号 pp. 14-19 査読無し
- ⑤ ロール・シュワルツ=アレナレス、「“Le ciel des Dieux satisfaits (Tusita) - Une entrée par l' Occident -” (弥勒菩薩と兜率天 ~西洋からのアプローチ~) 『兜率天往生の思想とそのかたち』平成19(2007)年度 ~平成(2010)年度 科学研究費基盤研究(B) 研究代表者 泉武夫 研究成果報告書 2011年、

pp. 97-137、査読無し

- ⑥ ロール・シュワルツ=アレナレス  
「日仏交流の中のテキスタイル—技術デザイン、コレクション—」比較日本学教育研究センター年報 2010年6号 pp. 47-53、査読無し

[学会発表] (計3件)

- ① ロール・シュワルツ=アレナレス (企画)  
・2012年7月8日 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター第14回国際日本学シンポジウム セッションII
- ② ロール・シュワルツ=アレナレス (企画)  
・2011年7月4日 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター第13回国際日本学シンポジウム セッションII
- ③ ロール・シュワルツ=アレナレス (企画)  
・2010年7月4日 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター第12回国際日本学シンポジウム セッションII

[図書] (計1件)

- ① 『共著論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』「日本仏画の記述と比較— ガストン・ミジョンが見た東寺旧蔵十二天像—」発行者: 有限会社 竹林舎、2012年 pp. 371-390

[その他]

ロール・シュワルツ=アレナレス (企画/コーディネート)

「日本学の旅 (III) 着実な交流の成果」日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成、「女性リーダー育成プログラム」による共同ゼミ、2009. 12. 01~12. 04 パリ 共催: ディドロ・パリ第7大学『平成21年度大学院教育改革支援プログラム—日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成報告書』2010年 pp. 324-331

ホームページ等

<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/sympo/sympo13/sympo13poster.pdf>

<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/sympo/sympo13/index.htm>

<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/whitebook/index.htm>

<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/sympo/sympo12/index.htm>

<http://www.dc.ocha.ac.jp/dics-jacs/consortium/sympo200907/index4.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

SCHWARTZ LAURE

(LAURE SCHWARTZ)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：20377013

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし